

飼育期間中のアユの成長差をもたらす友釣り釣果の違い			
<p>[要約] 漁獲後、飼育池で無選別で飼育されたアユを成長の良否によって大・中・小に選別した後、「選別大」と「選別中」を県内の同一漁場に放流したところ、最終的な回収率は「選別大」の方が高かった。また、漁期後半になるほど釣獲物に占める「選別中」の割合が高くなる傾向がみられた。</p>			
水産試験場・生物資源担当		[実施期間] 平成16年度	
[部会] 水産	[分野] 環境保全型技術	[予算区分] 県単	[成果分類] 研究

[背景・ねらい]

全国的な冷水病の蔓延に伴い、河川放流用種苗としての琵琶湖産アユ種苗のシェアは低下している。しかし、同種苗に対する潜在的な需要は大きい。そこで、そのシェアの回復を図るため、飼育集団から一層河川放流に適した種苗を選抜する技術を検討した。

[成果の内容・特徴]

- ① 2004年4月12日にマキノ町海津地先の琵琶湖でエリ網漁によって漁獲されたアユを同年6月3日まで飼育した。その後、成長の良否により大中小の3群に選別し、「選別大」と「選別中」を翌6月4日に永源寺ダム上流の愛知川（愛知川漁協第5種共同漁業権漁場内）に放流した。なお、最も成長が悪い「選別小」は放流に適さないと判断した。
- ② 放流種苗の詳細は表1に示すとおり、「選別大」が9,688尾（体重7.5g）、「選別中」が9,061尾（同5.1g）、合計18,794尾であった。
- ③ 漁期間中に確認された釣獲魚（334尾）の内訳は、図1に示すとおり「選別大」が75%で「選別中」の25%を大きく上回った。しかし、図2に示すとおり、日数が経過するに伴い「選別中」の占める割合が増加する傾向が認められた。
- ④ 図3に示すとおり、6月4日に平均体長83mmで放流された「選別大」は、7月中旬には同133mmまで成長した。また、同75mmで放流された「選別中」は8月中旬でも同130mmに留まり、漁期全般を通じて「選別大」の方が釣獲されたサイズが大きかった。

[成果の活用面・留意点]

成長の良い群の釣果が良好であることが分かった。今後、放流時のサイズをそろえた放流試験を行い、評価をする必要がある。

[具体的なデータ]

表1 放流種苗

種苗由来	2004年4月12日エリ網漁による漁獲魚(マキノ町海津地先)
種苗養成期間	同年4月12日～6月3日(この間は無選別飼育)
冷水病の手当等	加温処理3回(25～27℃)、投薬
種苗の選別	同年6月2日に業者の選別機により、飼育群を大中小の3群に分け、大と中を放流魚とした。 選別基準 大 8mm幅のスノコで残ったもの 中 8mm幅のスノコを通過し、6mmのスノコに残ったもの 小 6mmのスノコを通過するもの→サイズ的に放流は無理と判断した。

表2 放流尾数

種苗	標識	放流尾数	平均体重	放流日
選別大	アブラ鰭切除	9,688尾	7.5g	2004年6月4日
選別中	右腹鰭切除	9,061尾	5.1g	2004年6月4日
総放流尾数		8,749尾		

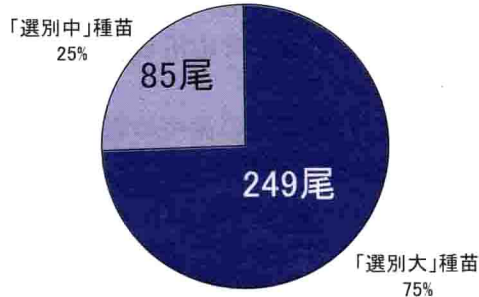


図1 漁期間中の釣獲アユの内訳

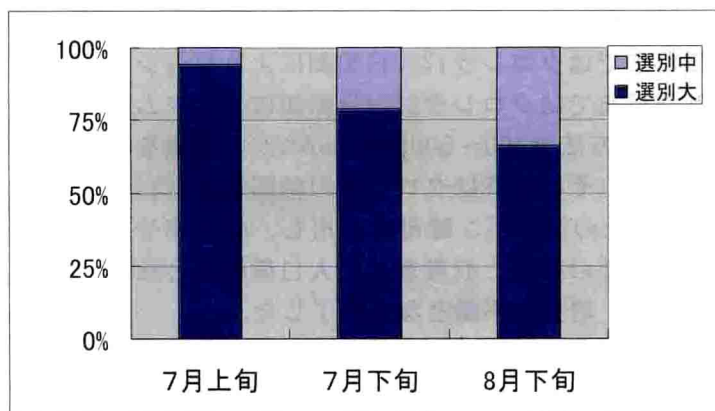


図2 釣獲アユに占める「選別大」と「選別中」の割合の経時変化

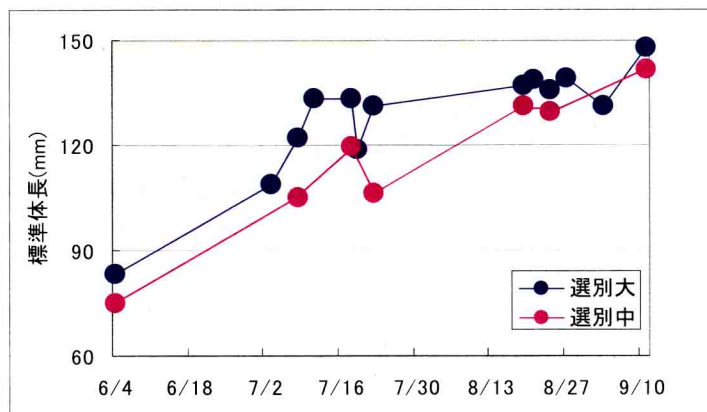


図3 釣獲アユの体サイズの経時変化

- [その他]
- ・研究課題名
大課題名: 高種苗性アユ放流技術開発
中課題名:
小課題名: 飼育期間中のアユの成長差がもたらす友釣り釣果の違い
 - ・研究担当者: 片岡佳孝、西森克浩(H16)